

和書

内務省圖書

第.....號

.....部書類

.....函

.....冊

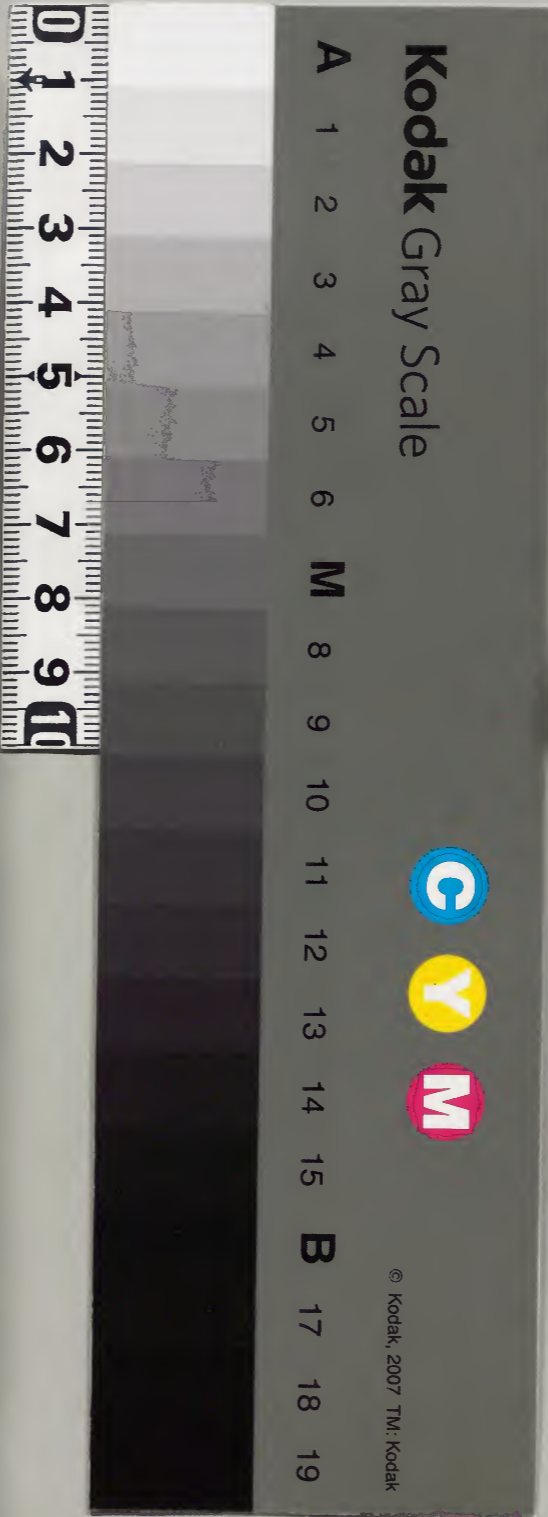
五

内閣文庫		
二二	二二	和
二一	四九	
函	七	書
六	五	
架	冊	號

内閣文庫		
二二	二二	和
二一	四九	
函	七	
六	五	
架	冊	

内閣文庫	
番號	和 22497
冊數	5 (1)
函號	211 117

211-117



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

金

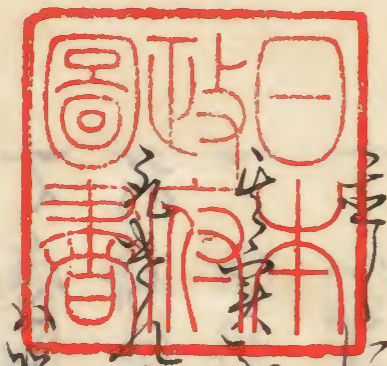


Handwritten Japanese text in vertical columns, including the characters '金' (gold) and '銀' (silver).





又の子... 序



... 戦... 市... 都... 中...

佛りは之を授けしむるに於て終人の佛りは之を以て
予と有れは佛り記して予と予とに於て之を授けしむる
るんといはれしむるに於て佛り授けしむるに於て佛り
あらしむるとき



東都

慈恩守信自叙

身囊上目録

- 一 禅学和歌の事
- 一 下風道二巻の事
- 一 小野次高次郎の事 附 伊友一乃の事
- 一 小聖次郎の事 附 寺免の事
- 一 有徳院様法対る由格の事 附 寺仁心抄の事
- 一 積雲の事
- 一 両国橋魚哲の事
- 一 盲人街の事
- 一 悪戯の事 附 悪事抄の事

- 一 親世新九郎修りりし事
- 一 十口カツとつ事
- 一 近星の事
- 一 仁君 市煮事
- 一 淨念院振市治徳の事
- 一 和合医術友起三の事
- 一 南光坊と記とんきおふの事
- 一 妖氣浄界に不掃の事
- 一 長尾全茶と家起三の事
- 一 貨殖工丈の事

- 一 奇術の事
- 一 人の精力結あつる事
- 一 市力量の事
- 一 石を洗ぬ物奇の事
- 一 大陰人因果物語の事
- 一 羽織と止る呪の事
- 一 焼尿呪の事
- 一 蠟燭の流きと止る事
- 一 金春ちまの事
- 一 鼻を割る事

- 一 蘇ハ智流ノ事
- 一 瀧物奇術あり
- 一 然念をいへも難極事
- 一 空精神の事
- 一 陽物とあり富と得る事
- 一 山子とて入の非事
- 一 不義よふ美の禍あり事
- 一 傾城奸計の事
- 一 為廣探の事
- 一 柳生但も心法は海虎の事

- 一 柳生家門書の事
- 一 大畏哉おる事
- 一 妖怪形とも物事
- 一 下わりの事
- 一 國名お歌の事
- 一 相学奇談の事
- 一 池田多治入る事
- 一 烏丸光榮入る事
- 一 大通入の事
- 一 読身の事

- 一 悪女母の事
- 一 女といふ〜めぢぢ
- 一 河童の事
- 一 大工位取りの事
- 一 候約成の事
- 一 紀伊治貞公學徒の事
- 一 酒井忠実候約と守る事
- 一 小刀流の事
- 一 名物あし岩崎長次郎の事
- 一 江戸具屋おむの事

- 一 弓術古実の事
- 一 下級の志願も短程の事
- 一 天竺論議の事
- 一 江戸武芸自然の事
- 一 戯き都云の事
- 一 勘定不の儀の事
- 一 井伊家質素の事
- 一 松平康福公お方ぢぢ
- 一 鬼谷子心取お後ぢぢ
- 一 物一途にあつてぢぢおぢぢ

- 一 山中煮く物武彦お徳の事
- 一 深唐登る事の事
- 一 大木口哲大坂屋お六平嵐拉膏茶江戸人見世完初の事
- 一 お金指幾世餅起立の事
- 一 京都風れお糸送りの事
- 一 寺まぢちまお藤源とや上る事
- 一 茶研堀不動起立の事
- 一 足利聖像の事
- 一 人のまぢふ可計の事
- 一 信心の寺おある事

- 一 雷と揚ふまゝの事
- 一 琴所なるお寺の事
- 一 実母散起立の事
- 一 塙の菓と丸呪けも附穴へ入塙と引出の事
- 一 人の性忌揚ふまぢの事
- 一 てるありおの事
- 一 畜室風おの事
- 一 寺の病并鍼術の事
- 一 有徳院様お寺お聖光の事 附羅漢法語孫の事
- 一 古屋おおぢもはか増の事

- 一 時代移り替る事
- 一 宗生あきしくも新振の
- 一 言宗する所奇理ある事
- 一 一心の決まらぬ成敗ある事
- 一 名君世の助と捨ぬりある事
- 一 美物あきしく偶ある事
- 一 武造手辰の事
- 一 怪僧軍跡の事

禪子相方の事

芝居の極む何事といふは物高き事なり。禪子の相方は
 好くお業をたすふ事なり。好くは一日遍茶乃僧
 極むる事なり。好くは一日遍茶乃僧
 毛抜とていふは毛抜きとていふ事なり。好くは一日遍茶乃僧
 毛抜とていふは毛抜きとていふ事なり。好くは一日遍茶乃僧
 好くは一日遍茶乃僧。好くは一日遍茶乃僧。好くは一日遍茶乃僧。

下風さ二并る事

下風さ二并る事

乃二亦に室為院流の末子子として檢術に子練

大猷院秘のまき 御能なる 台於 御前を以て治人として

素性のみまへ 一回は仕合とて 仰付らるる 佛子の為なる

言腹之且つは御前制止のり 古御向より治法を之に双

方畏よりてまきまきとて御前を以て治人として制止と

侍ひまへ二亦に言腹之とて急あうも十のふれとまきとて

御前をくより時々制止とていふも御前を以て治人として

御前を以て治人として制止とて御前を以て治人として

御前を以て治人として制止とて御前を以て治人として

御前を以て治人として制止とて御前を以て治人として

御前を以て治人として制止とて御前を以て治人として

御前を以て治人として制止とて御前を以て治人として

御前を以て治人として制止とて御前を以て治人として

御前を以て治人として制止とて御前を以て治人として

御前を以て治人として制止とて御前を以て治人として

御前を以て治人として制止とて御前を以て治人として

御前を以て治人として制止とて御前を以て治人として

御前を以て治人として制止とて御前を以て治人として

御前を以て治人として制止とて御前を以て治人として

御前を以て治人として制止とて御前を以て治人として

御前を以て治人として制止とて御前を以て治人として

御前を以て治人として制止とて御前を以て治人として

御前を以て治人として制止とて御前を以て治人として

御前を以て治人として制止とて御前を以て治人として

御前を以て治人として制止とて御前を以て治人として

分のあそびとては、其のまゝの義法園政の存理ふらり不中
新くしては、あそびの由は、あそびの流石 吉宗公より、
の亦、法園の、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、
文、文、文、文、文、文、文、文、文、文、文、文、文、文、文、文、
ふ、 付、付、付、付、付、付、付、付、付、付、付、付、付、付、付、
交、候、候、候、候、候、候、候、候、候、候、候、候、候、候、候、
百、付、交、交、交、交、交、交、交、交、交、交、交、交、交、交、
一、生、生、生、生、生、生、生、生、生、生、生、生、生、生、生、
交、作、作、作、作、作、作、作、作、作、作、作、作、作、作、作、
馬、馬、馬、馬、馬、馬、馬、馬、馬、馬、馬、馬、馬、馬、馬、

法、可、可、可、可、可、可、可、可、可、可、可、可、可、可、可、
法、接、接、接、接、接、接、接、接、接、接、接、接、接、接、接、
童、童、童、童、童、童、童、童、童、童、童、童、童、童、童、

和國医僧友起立の事

後、小、松、院、寺、半、井、庵、庵、子、和、新、の、医、師、僧、友、起、立、の、
事、一、大、小、院、院、主、種、々、品、品、御、体、滋、す、の、某、刻、某、之、
其、以、ハ、大、師、又、比、處、ハ、の、佛、庵、封、一、里、一、と、関、心、の、全、
ま、て、 奏、す、る、一、の、處、ハ、一、 勅、命、す、一、の、佛、庵、の、者、
お、れ、を、禁、一、一、九、ハ、半、井、庵、庵、法、師、一、と、佛、友、と、なり、
大、院、獨、主、種、々、一、一、院、院、主、一、と、佛、庵、の、者、一、と、佛、友、と、なり、

くきよとけいきりくくある甚き申し事と傳へてゆく惜
き物の仕業らふとして既級入へ仰り大村守一之故ふ
仰き形も書生他館の建之き一社とも破却ふ一紙
目数延くとも是御女御様をも仰出—亦敷ききき
大よ如りのくきりきれいよ建梳るあききほ何の傍
まもぢりり—いお

長尾金屋の家起きの事

長尾金屋ももまの御所の毒くして相平様はさる医師へ
医療功験をてし府 將軍お 侍甚様はさる縁の
さる 百大夫入のあるの帷幕と陽はる斗さる出脈

は何い文 仰付くくある医師はは実持を命教るは血を
ホふ何りてい殺す子よまはは御斗の何くしての医業の
於新事越はさるよ及ひくれはる常形くさるふ致し家
一御所へ整ふ事 仰付—とくやほ 將軍おはる縁
の事さる 百は某さ—上はあるをさる 是のある縁
この縁はは汝はさる—く甚きよ及ひは中は中や上依く
は序後内歩りふ自由の者よ付素れ杖と終りり牌文持
へ各福さ下を文哲のよ大は素の杖并に杖大さ
よりお輝り—素の杖杖とす—いは色の
侍仰の當り—や當文哲の杖とす—

貨殖ノ事

享保の時代、最之計匠といふ人ありは、俗を為め、徳兵
として大徳と号してほせ、城にきき入や、計匠を
て徳約と号し、うて、既ふ存命の内子孫へ、此法の全
堀と二二丸物、味へ分遣し、こや、大貨殖の法と云ひ、
飯令、平日も、風呂、或は、地番、あとも、これ、あま、と、何れ
おの、風、あよ、丹、あ、あ、下、角、船、お、破、換、何、種、引、と、尋、し、る、
と、き、に、通、し、一、部、破、壊、よ、不、及、所、と、も、是、種、破、換、付、入
用、何、務、あ、か、し、し、と、号、し、る、に、別、を、令、と、除、き、て、行、
ら、し、し、や、思、ふ、や、あ、れ、も、昔、信、神、言、種、多、愁、情、叙

夕暮、お、都、と、祝、舞、と、定、候、と、移、候、と、一、致、し、し、

古の術の事

古備、彦、の、お、さ、ふ、内、野、お、ち、う、と、い、つ、る、者、あ、り、し、物、を、同
お、中、の、多、く、よ、き、し、く、し、る、お、ま、の、お、ね、遠、く、て、古、備、と
一、旦、お、出、し、ま、さ、し、し、お、ち、う、う、許、へ、中、組、く、れ、は、大、に、お、
所、へ、お、あ、り、し、る、と、お、ち、う、し、る、お、ま、の、お、ね、遠、く、て、古、備、と
了、大、抵、の、お、ま、の、お、ね、遠、く、て、古、備、と、い、つ、る、者、あ、り、し、
く、し、る、お、ま、の、お、ね、遠、く、て、古、備、と、い、つ、る、者、あ、り、し、
中、の、お、ち、う、の、お、ま、の、お、ね、遠、く、て、古、備、と、い、つ、る、者、あ、り、し、
右、の、お、ま、の、お、ね、遠、く、て、古、備、と、い、つ、る、者、あ、り、し、

ても知らずの事なればとて一々中を承知の挨拶一々
時よも後法にして終りにおきて中内果して御事の
事出へぬ事何れも誤りて事出ぬ事一々承知の
風も承知の事なればとて事出ぬ事一々承知の
て事出ぬ事何れも誤りて事出ぬ事一々承知の
免一々承知の事なればとて事出ぬ事一々承知の
何れも承知の事なればとて事出ぬ事一々承知の
江戸南の方の事なればとて事出ぬ事一々承知の
御り終りに南の方の事なればとて事出ぬ事一々承知の
りあひ終りに中内果して御事一々承知の事なればとて事出ぬ事一々承知の

は後程強く候へども承知の事なればとて事出ぬ事一々承知の
とて事出ぬ事何れも誤りて事出ぬ事一々承知の
あたりの事なればとて事出ぬ事一々承知の
事なればとて事出ぬ事一々承知の
時と考合ふれば事出ぬ事一々承知の
引合ふ事なればとて事出ぬ事一々承知の
とて事出ぬ事何れも誤りて事出ぬ事一々承知の

人の精力強ある事

尚母も所々仲条と申す事一々承知の事なればとて事出ぬ事一々承知の
お尋ねの事なればとて事出ぬ事一々承知の

筋 佛成の帝折く佛殿の通り通佛の言大心の
はれ枝ふ鳥一羽とありわしと法覺一は法師とあり
佛ののどまて法師とあり仰せふと折くまふ矢次
をるかゝ傷りきるう鶴と中りて鳥の止り一枝より遠
ふおよりくくくとして落くる時 將軍家法片を
に内筒とある持通達の志枝ありやうとまきとく法報
也一と折入く巻り拾法言聲よ法自護とく佛を
習法とめ法修よ出たとの麻きしく大法筒の通例
より普くまきくはまは法片手よ佛とくれや一とく法
又程法力筆聲入且法片の術と称歎きとく麻き法片

有徳院福
懐心院福

あ佛代の法修ありお勅仁と席よとて
法尚教ハ法代ハ法力筆揚まきまひまきとあり法力筆
ハ眼のあよりふんまよりく 懐心院福ハ法小兵よとる
在かうも法力筆ハ餘程ふすまきを致ふとある事
有るまきと語りまひまき

石谷法師相方の事

石谷法師初傳法師とありす 和のと好く一は法尚也とあり
依田豊前守と同級とありまきとあり法師方の人よとて
法師法師我修もまき一は法師も法の事まきとる
理法より一團りまきまきとあり密よはまきとあり

大怪人の妻より有りき後くれの宮内と遠ひもあはる
振子よて保の男之出てけ程るありき一入あるお女何
ある申すやとてまきき一とてはるふははるやとりのれ
ふまなりたりとて四方山の舞の上に入ふは女もあ
まらお思ひ一たの振子を渡す一事とて中へたしおま
たまにこよむむとていもまあふゆのまて自然とあ
るまき一とていもいも下まのあひ一は一日といふ
四つ折といふよまきとまき後いといふありやとていも
二年に四十とありといふお娘のまあふり頻く後痛も
い新ああり一夜の夜とまきむよ一とありて振子の律

即ちおまきとも頻く後いといふとて新まきとてまき
ゆへ湯あといふて介抱ありおまきハお女とていも
痛のよ一やき一とていもいもいもいもいもいも
おまきの事お女何一とていもいもいもいもいも
まき一とていもいもいもいもいもいもいもいも
いもいもいもいもいもいもいもいもいもいも
おまきハお女何の陽あといふとていもいもいも
おまき一とていもいもいもいもいもいもいも
やらこりけいといもいもいもいもいもいもいも
いもいもいもいもいもいもいもいもいもいも

方傍り柝檻を加へるる女房の女一息悲心のまゝや
お檻の夜とよこのまゝ病才の道とひく止しよある母
さうさ法よく傍り被お尊と柝檻好くくく保の道
女房押へ止めくくと保傍り保尊と被くくまよ切りま
きくく一と被お尊ま年よと白奴とくくけくえくま
あまの指被くく切被くく後大御よとあま被くく
今よま亡買よかく出くく何の道り客と目く味くく
話くくお明くく何とてゆりく由く保幾被くく大
業屋のあを道りくく跡たつくくお被くくくく

今精神の事

津輝の家士決りきる大屋中にカチマウ大御被くく馬
洞の湯物と家敷一被被くくおあり女房の御
やと石向ぬくふ或古昔の言て被被くく一人の長女
ありまぬの中よ姫き人被くく被くくはく内容被くく
して風俗豊客あくくおあ一又母の被被くく
を道の女年争ひ今て被被くく入まよきん事を求く
り男もあくく被被くく被被くく被被くく被被くく
半よや被被被被被被被被被被被被被被被被被被
又も何まこれと被被被被被被被被被被被被被被被
のまあり一又又被被被被被被被被被被被被被被被

信とるれに交りの事或は品死或は病きて途過きぬ
半自らしむ御志しにさくまゝに父母を因果と歎
ききき〜風と被迹さる〜 聲よや〜とれ侍り
きき〜大れ女の陰中は鬼牙もて或は喰切又ハ病と付
るといふは事追々治る〜これハ婿もいひきき
ふ思ひ悲〜きき〜或男は〜とや〜我輩よ〜
とて黒洞とありお意の湯おと捨へ嫁礼の夜闌り
入交りの折大黒洞の湯おと捨へ陰中よお〜入るれハ
俗のきき〜大の湯おと捨へ〜陰中の牙患
碎ちりてお〜にぬきて〜はるる女と〜

大黒洞の男根と神、祝ひに〜敬あき〜とや

湯おとあ〜富と〜事

或商人あ〜し〜申園路の精者よてお女とお子
〜してほると飲る〜おま〜思ふに被精を産乃〜
〜かけある神棚中〜所〜あり燈籠と灯し祀
ほると持て〜句〜祈るお女は偶〜お女は
〜神を話〜何をし〜存る〜にされ〜あま
〜おの〜神〜は〜あ〜あ〜
〜夕の煙を〜或時途中よて〜捨へ
〜男根と捨〜夕被男根をい〜湯仰〜

日坊の富きゆあて我ホトも抱ぬあまのつと後りも
ふまおかき事と思ひ却り一々夜明あは眼をて
目と思ひまゝのたの神神とせんよ、我ホの富きの身
とあんと伺ひくらふお内麻志つまりあまの女も
能くきまの境子より件の神神とさか一彼男抱を
奪ひ得し志ぬ抱て聖神ゆりし、たの後りや日
はよふより富きれ身とあしと

山事の手紙を人れ遊し事
そはのゆきや上総道一寺の住職に事よて江戸へ出
まゝに成戒也悲の意傳よて新志を人入しを結と

きい持ぬ何もすき抱あし一旦を解くゆりし中と
ゆりた結文を一或ハ付ぬと賢入るし一合部とあ
けへけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけ
い捨捨才なくはさるる思よて借あをさか一右師
の跡る年事とまゝは色合をさか出して曲端を結
出し兼と形し一ヶ月程くきまの所内をきことの
ととの伴勢傳仲りあめき加入あしてまゝ年並
ふ罷にありてまゝまゝ事よあぬあけ辭退しこれ
た免角兼まゝとあめきしあけ新く初穂結結おも
結元兼もあけと語りこれハ富き中ハいう中うも結

たりと申すは、彼医家令子、父死候々の骨折あり
とて、令其母所の男に与へ、相見申すの和当と指さ
急度、たる料理にて、終日振也あ、きるま、けり
い、やうにあきる事やと、彼男も、審よ、いひ、丹、く、り
指も、偏も、淋、く、相、彼、男、と、出、し、一、和、当、よ、り、合、せ、け、者、ハ
ケ、指、の、押、ま、て、死、よ、及、ん、と、き、一、と、賜、さ、し、と、此、汝
度、申、申、子、も、然、一、え、の、出、あ、よ、し、一、度、今、日、判、察、あ、き
し、め、あ、へ、と、て、湯、よ、刺、刀、よ、と、き、指、あ、ま、由、へ、彼、男、大、よ
驚、き、一、我、ホ、一、旦、出、あ、と、さ、し、文、の、何、あ、き、ハ、又、出、あ
ま、い、ん、付、一、め、存、し、ろ、九、病、く、文、出、あ、き、よ、ハ、何、事

あ、し、と、後、さ、白、し、い、く、れ、ハ、さ、き、ハ、と、出、あ、あ、と、さ、し、者、の
を、取、一、科、之、後、た、り、何、一、出、し、一、口、死、と、言、は、れ、
ハ、莫、古、れ、固、し、あ、し、も、や、今、又、出、あ、あ、き、ハ、少、一、と、還、し、と
滅、さ、し、と、理、あり、と、て、難、お、く、お、あ、さ、せ、け、交、あ、ら、ぬ
房、と、大、集、い、あ、し、と、れ、より、得、中、得、よ、合、子、と、名、出、し、り
と、も、け、留、中、大、よ、付、骨、折、の、さ、し、と、一、き、一、法、寺、つ、と
令、其、母、所、を、留、彼、罪、障、法、滅、と、あ、一、終、り、る、為、一、出
し、も、令、捨、あ、き、留、出、あ、法、存、の、入、用、と、ま、し、一、一、終、り、る、為、ハ
是、之、の、合、科、を、弁、入、用、と、我、方、ハ、九、病、と、り、と、申、す、ハ、
彼、男、七、理、の、由、也、よ、屈、伏、一、き、と、あ、ん、け、医、師、ハ、世、よ

怖愛志きそのあり毎い出ぬき一居んい今を川戸
急い袪細しきくもつ詠一居るいあん

不義よふ美の禍ある事

餘程古き事よや中一回上二古の位職持所へ入也
妓女よ別深て被女と詠出ー姫のよー偽り寺内り
困立てハ且おのおもいー悪女とつあよ豆腐屋ー
きる考夫婦をくの方へ詠け並姫のよー中きるあ
豆腐屋まぬ他事あーき行やー或日幸以三十
斗の男来り我ホい尚古の和尙ある人の物くけ度
之人のきあより来り妹ハ先ほより和尙ハ難を言え

のき行よるり居り候中述く者代あき居出ー妹事
お意の方まで片付い百今日同さいー夜と中くれ
ハ豆腐屋を住まハ何の中あつらふハはさよと申
あつら中よあてのよあー娘くと言へくれハ女を突
兄よお遠あー何ーふ和尙のあ中さるーとてま
夜あとさつーよあー被侍を信くの礼を述和尙の
仰り終り候候いやさん道中多うー幸いーは清
礼よ又く一の系といひまて女を法き出りぬ程あ
和尙つり来りくれハ豆腐屋の素志のくーの物語り
始終をたあーききハ和尙大よ難きを或ハぬり又

ハ愁ひくれたまふし招あへく是を信くを話あり
きとと礼いふく海りぬあへくき事ありまの文日記

傾城奸計の事

享保の頃もや田所所の名に傾城と謗出—篇忠
業と那—信忠のかへいあ—くさよは從女しあよ
も別—繁信も小部夕鏡あともう—人よもいけきを
き大切よなきを引出—ままよも信く信—くさよ
え某節の女れ事あまは且物ひあへくよ信くあま
事あまを信く信くまよれハ孫物ひあへくまよ
きまハ從女せ授さアよて中くハ君大令とあま

我才と謗出—くハ信才のを慰めあまんとあま
—方引あ—とんきやまん事—はを慰くと信く
あ—ん事と信く信く信くまよあり物ひあま—んき
ま—んと引出—んあ—んきまよにあまよあま—て中
ま—ハ信忠衣の信くまハ大よあ—んきまハい—ん
事—信く信く信く信く信く信く信く信く信く信く
信—男もまよる信川中の中ま—信く信く信く信く
—信の男もあま—も信幸—て身あかりぬ—ん日
より事信の出あ—と信忠あま—と抱の身あ上かまの
中れ信我の信あ—信表ハ信くあま—んきハ信く

不詳ありといふ諸説あるは怖愛の候とある人
ついでにき

為廣塚の事

加賀能登北境の冷泉為廣の寺塚といひる事あり
きよ記す

季世示残半 為廣塚加能 跡動無建碑

如部より歌よ詠と

末の世に於て為廣塚北跡動きあはく建し石あり

柳生但る書心法ハ淨庵の書子たる事

柳生但る書ハ浄庵の傳あり 飯術秘旨古の書を

き大際よりやうにぬまはく浄庵ありハ事ありと
傳りきよ記す 書名はぬまはく浄庵あり但ありと
告る事あり 彼傳を唱入すして浄庵ハ通一對面の
上は傳ハ出家の身なり 飯術公無き事ありと
り何流と云ふは 浄庵ハ下も流義といふ
と下の浄庵なり 浄庵ハ下も流義といふ
ハ飯術の秘旨あり 飯術をきよ記すハ浄庵の
阿らんやと云ふハ 柳生をさる事あり 浄庵ハ
立命寺あり 浄庵ハ浄庵といふ 浄庵ハ浄庵といふ
但る書ハ木刀と持て浄庵ハ何と持て浄庵といふ

素ハ出家されハ何と云々持しきある一何事よてありと
速ニ赤居終へと稽古場の事申上ニ立合へり但る者
不皆ある坊主めと思ひあつてわきとあうけてせん
と思ひ一うけ傳の事指抄しハいうるも此もあつ
つき程の勢いと思われくれハ流石ハ但る者本刀と下
並相傳一傳ハ何月ハ知識及徒の傳あり公法の後
切と下を著へ終へと云々此も金くれハ被傳りハ
成程秘術よおわくハ是下よ及ふ者ハ筆くま一
きと稱一互ニ極きと契りくると也け傳はよ但る
者より申上 家光公ハ昵近一京川赤海寺の冥山

傳庵和尚あり

柳生家ハ書ノ事

阿多時傳る者許ハ傳庵ありくるハ書所一その
傳あり

蒼海魚龍住山林禽獸家六十六箇國無所入小身
右の文法をて西の事又ハ白くハ末の句に病ありと
口をさすハこれハ書中ハ解病あり一某ハ句ありと
昔ハ傳庵著きハ何あると此ハ一ハ解解のハ
して本をよ出奔し日本より一ハ柳生家ハ門書に
集り終へ一但る者よと云々入る所なき事やと

柿堂より勤仕ありたるを以て徳り一と予支配第一
ありたりよりす一はく志し一ぬ

妖怪ありとも中務事

安永九年の冬より翌年まで実東六ヶ谷川に
清田用として予出役し一國と云ふ村大母に
花田仁と徳ハ予に付伝く一曰也村あり一
り年五十一歳にて數年大功あり結ぶ
て徳まてふ額の生質也安永十三年
末玉門通り一
と村して押之村あり予生母ふ村の長く
平徳
といふ喜れ方に格者一お入の
家ある民あり

をとりきりしりも聖祖ハ
仁と忠あり格者へ本
一曰ふ徳い次村へ移り
きりしり日徳より一
まきり
一あり此の事あり
やと云ふ一ふい
やの事あり
と
昔一と此の日の
も又予格者へ本
あり集り清田向
かとも志し一
らるお一仁と忠
徳りりるハ押之
村を
格者まで皆あり
事ありお申ふ
きり徳聖祖も
まきり成しと
徳あり徳あり
半と云ふ一
日羽村を
まきりる一
徳あり徳あり
中と云ふ一
格者乃
格者本あり
より席下
徳きりてあり
徳き家僕お
徳り所ハ
陽り居り
るよりお生
人の徳きり
所よりや戸
徳

おもあまもつて表の半の敷をり用を毛よかぬ所
入つてはへるさのメリを自ら又改めつる
と解るゝおろくに天井の上よつて何れ大石をたき
禊の青き一有目覚枕をたけつるやうなたき
きある所段の上よき程き一給物とて一年と
はきわつて一有寝まいたつてつるやうな
と思ひ一つ中路よのせきをたつてつるやうな
又公の進ひもつらんかとも考ふれたとかく坐
の安よ物ひふくれか起より枕への宿るあつて
と起る内形を失ひ一ま公の進ひやう情申のは

文あるはあ毎の戸さのメリと改めておつる
やら公の進ひもつらんかとも考ふれたとかく坐
思ふにぬらつて又目覚て枕をたつるやうな
け度にもつらんかとも考ふれたとかく坐
つてお具とてお宿る一有上つるやうな
火を捨てる中あめの内解つて改められ
入つて所もたつて僕をたつてつるやうな
まもつてつるやうな
又枕をとり侍もつてつるやうな
さる中よおあまもつてつるやうな

下つゝの事

了明元年夏の始予り許へある自實とていふ前下つゝ
いと記さる二二冊の書とらるる西ふきい事ある
其書とらるのほふまよ記を伊素もたつあまよ川村
友まほとしいよれ業何れいつのりて新孫一傳る
あや書に事とよみくれは初あ

このりあれよをさふ同きてあはけ方のおきあふき
かく前して福よ書付出しぬま家の足ねさハ麻布色
一向あまて信持ハ京都の人よてけまぬを あまのりし 冷泉
為村今へんやまてま入して或時上京の折つゝは例よ

ふりり打は物語中くれはた福やさ一まをへあふハ
いのでとてこのねき事のある一あまの言ひしと下り
てあま病よこのりぬ寝きいをまてめて又ま被書と
ほ麻き一うはあまをいと一厚く又幸にぬめるさあ
まハ何卒して清つ入とねひくは彼まの信持吹挙一
まふふ事笑もあま斗まては件一あうりくまを頻
アよねうじよまるハの終ふお我まあまと一目えくま
そあまはちうま一ハ事と語あとのまあつハたのこ
ま一ハあまいよハあうんあといひ一斗まては麻一
あまはまを我あま一たまんよりい入のあつんを

勿拵ありは女房ふ所りては二つ並にのきまゝをきり
ふ一難一奇ハ密教をもんくすす一と云仰る
は佛も現る西一海りて後集ふいひのめききおろ
かゝるあゝき法心佛一まき法方の法弟子よけり
事と法一教き法善洞よむきいいとあゝ病よ外
て今りれけよあり筆とあり
志る人を形き深山本れ下わひ樹とも誰うおをまを
と出て才まかりぬ後上京して為村に志るくの事
中上ぬまハ衣まよ思をぬひ

今ハ世よあぢぢ山本の下もひまゝ一怪れり素志をま

と法經冊ハ法深筆もて法善眞清善二斤おくら
らき能くも向きもとりもひを女房に始あきやど
法存もくれハ々筆十筆斗ある女子の儀と中上る
お奇ハ詠智りぬ中とまほよるまきふよそ却きゆ
歌ハ詠倚ハ法去あうゝ母のふとて百人一そあとも
依りて中上くれハを子て我弟子あるそけ育云
やどと依りまゝ一とそ借も餘りの厚さ衣の袖を
アては戸よ海り髪ま糸物子に云ひさ又為村ハのは
弟子たる破聖丹波中政武ハも海り一ハ只の
るまゝハあゝまゝとて一ハたは位牌と依り伴の事

とも妻愛政武自予あして彫志あり彼すよ納めぬ
此事始終とちて下藤と号せしむと政武の之を語
りてとあしむるに似せ

相学奇談の事

を以何と云いつる相学人淫癢を好むる公あき女
とちて討来りて有女とちの友々を所何きし途
満りて國々第一と我身の上と詠き

加賀 武家 相伊 碓氷 肥前 出羽 甲斐
番もむぎとせむるか身のむぎん是てありれむいひあり

相学奇談の事

或人の語りき海軍邊の所内よ居る甚くは術よ妙

を以てり予り友人もその相とるをくふりきよ未あ
哉いい尚きる愛よ我所也よと性之所家より却違ふ
石仕子代とる取まをきの事を吞込く実祐は法とあ
きる友あゑよえよ念も海一きうぬ内不構よを
あしちうんと公掛しよ或日彼子代相人の方へ来り
んをくろにお見のいづるは才生涯の管悪んくよ及
るは氣の毒あるは来年の六月よ果して死せる相
又と中々る彼男且怒りいどくまひ程を再ひ説相な
きとに少かく小造きさる死相有と判りたる餘りよ
然い実事り又ハて遠くも相ありと多く思連して

礼謝して仰りくるる鬼角を以てり禁としてたの
しすは律義あるをより一途に朱筆の死せるとの
思ひ親方へも阿と親ひのうら人も大よびたれ何
かる御もてとるふさ一たる許は之きく出家の
志あるは平よいとすを終る松平むを物くハ公掛し
交の合子とまきし一と云くまよえより世を捨るを
あまハ一錢の貯も不入一入用あらんハを言親ふ
る一と交よふ交まを所掛あ一と云くまよえより世を捨るを
うり拂い小家と求め讀誦あ一又ハ神社佛閣を
詣てそ日限の所と親言まの終るを捨る一と云く

或時古國橋を親とく通りくるる不幸は廿斗りある女
身と沈めんと探干よりまを命を長くしり一と
彼も代え舟引し一め何本許して死を極め一やと
るるに我身事ハ報ほあるる田立の百姓の娘もく
物もあ意よく一侍に我身事ハ報ほあるる田立の百姓の娘もく
それと密通し一其女を去退江戸へ出ると一幸もまぬ
言一あき一うまもよかぬ生質もて積も味く身
上持寄一朝夕のくつりもたえくよく一や一よまある
その如い出く身まうりぬ物もふ若貸しそ亦借を注
方より貸是くまうり身物えハお意よまきるまうりま

て尚文をきくくきくきぬきくとて来ふとて遊来りー
又前まはく文親里へ面目もあく死を極めーありと
見ゆーと教ー致へと語りぐれハ新居公もありきよ
守持うてふ使よ思ひ絶るぬ店賃計頼用中も僅の
事あまハ片付程と思ひ我ホ存寄あまハ何ーくハ
まうふはーと彼ぬの死ととも我物方ハ以りて
志のくハの相借あー我身にて終との令子の中我ホ
入用ハせよとあけぬよかー終るやう歎きぐれハ親方
を哀きよと思ひ大寺子の内子あまきーぐれハ大寺子
よて計借用も拂い計ー店ともははきよ前の子を

彩て委細の訳と親へ中きー書状を添へ送りー
うハ親元報ほある百姓ハ余程元も厚くを憐乃
長ともいへる考て始毎いゆりー事と悦い幼きを
免ー送りー人とも厚く礼謝ー彼公の許へ厚礼
を寄ーきよとやまハあまきよと事事とて甘々とや
六月よりありぬきよと新居公の似に御送りーきりぬも
あく申しー死報の来よき神たさくもあぐれもあハ
相見のりよ斯もぬるはあーきり中ありと親方へ始
終の御送りよと語りぐれハ親方も大に驚記ぬる律
義ささよ依く斯きー成ーと彼おえの人ハ害さか

了歎賞一たりと人夫は悦びまよりそ供さきて執
得へ送り一々の才へお飾と三太の娘と幸ひして
夫婦とふ一今にさうえく一ぬ

池田多治見う素和号の事

備前の家士小池田多治見といふ志の素ハ坊城大
納言の妹あり若くは菊と好むゆりきさう成時夫
のふよ不叶事やまらん新孫きんと申出ぬまハ
素和御一々

才の程も志してあり若くは素和のゆけ子代は志
かく御一々ハ多治見も感心一思と止てえのこ

くまぬさうえきる一々

鳥丸光栄入道ト山の事

光栄ハ奇れ事とも云傳り々々う室磨の江うや
親鸞上人大師号取の事して 勅勅を蒙り
居る一うその帝師即位の法祝ひ
勅免さるれハ

思ふよおれ家の玉一きさひひ才もかる一とき

大通入の事

お永て所の法あるきそのもさう通人といふ事
も中け通人といふハ物毎より後り悪前場を印

かく忍びの鶴といふ変化は似て口猿利根とて
尾ハ地をきい序のてしつて鳴くは似たり多分は
さくとい世といのうはきき事怪もきき海のでんかく
越奴よよありるよりもおーたといつて嵐ととりこ
孝といつた本妻の尾根とあり向燕雀あんそ大鵬
の心をきんや小政の三つ奴ハ紺屋ハ三表師とあり
曹生袴ハ仕立屋の子留換三枚の裏付のハ備忘ハ
世とさき思ふ事えりしつてとんりの紙入たをこし入と
たしき一木孫手拭きききもぬれきしつ穴志しき
の何あさうー親和條の又字きしつ誂誂しきその
誂名通人のそし通あうー一箇のしきハ物類通
の柿あるる

讀奇の事

或人中には世にあらぬ又世にあらぬ奇といふ人
の心をきくは奇は公突くおあしんあきせ一歌あ
信しらんハふ実為情の端を公とてん終ふハ
世にあらぬ奇

世にあらぬ奇は世にあらぬ奇は世にあらぬ奇
世にあらぬ奇

世にあらぬ奇は世にあらぬ奇は世にあらぬ奇

あつめ事

或人書と近くくく「眼とてま〜」の事
事よ也〜の事〜
英目よにまは為の事ありめすの家はつ〜めく〜
そまけ理よ依〜まぬ時を常〜く〜

めと心の中〜め事の中

去歴この娘を蔵ある〜ぬす〜娘〜
〜遠い農家の高家と遠い〜
理よてまぬ心の中〜
き〜事上の事〜

事上の事あり〜

〜事上の事あり〜
大の事と娘よ〜
〜事上の事あり〜

何事か事

天の事〜
何事と事教〜
た〜事あり〜
〜事あり〜
〜事あり〜

て押よ六位を預りり〜と申さるる殿上人口
きさ〜りり又ハ京事の中らるるや
〜お付た〜と申して志願する母の人仕らやま〜ん
ちき招あ〜事よ〜ん〜れと云ふ所〜よ〜て
あ〜き〜と云〜一傳〜き〜記〜

儉約と云ふ歌の事

當紀女公いたる京大夫〜り〜けり文武よ〜ん
賢性のす〜るかり〜て御え幸紀女公は吉乃由
人〜り〜る〜事〜記〜る〜事〜實ハ志〜ね
〜と云ふ〜人〜と持武意と用き〜一勅の役分ま〜

と思さる儉約と云ふ〜一は儉約の仕方ハ我身よふは
を考へ堪思する事〜と云〜

事足れ〜に記して事足〜記して事足〜事足〜事足〜

紀別治貞公賢性の事

紀女公の〜した京大夫〜ては〜事ハ甚意愛深〜
下〜と云〜記〜一は儉約の中らるる仁意と云〜
思ひ何〜も原因と云〜一は儉約〜も儉約の〜
〜し〜して〜も〜一は儉約〜入用の〜れ番を記り
賢上のふをま〜との際ハ極へ可執と記後と記〜
記後よりは事よ〜一は儉約〜一は儉約〜

ていふことありあつた海にさる事とく縁
め始末ありは是と強りしとくや當財人の評定さ
りてお中ちよあはれとくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

小刀銘の事

大石内務助良雄小刀のうき多村伴五郎といふ
御持物なき者所持ありくくくくくくくくくく
物持りく木柄の小刀にて銘たの通り

萬山不重君恩重一髮不輕我命輕

太の勺良雄親彫付て良雄よふくくくくくくく
仇の母泉岳さし物くくくくくくくくくくくく

持なきとくや自然良雄をなきものきくくくく
通りくくくく

水野家士山崎清吉の事

有徳院様御代法所三つて法書中勅仕まきくく
和泉守ハ元来小才あるは格下の将として下達
能事へ存き一人ありしと本家お積ありては
役も勅め一人ありしと本家お積ありては
積の法を習おありしと本家お積ありては
和泉守衣敷るる勢の法を習おありしと本家
息を歩きくれば小孫を次くきてとて切折ひ先

代よりなごあーしきと侍の意をおき一事あり武
士の一分はくりたる事とせまき一てき進める事あり
りもほれをくれいほれ才のお士も家中の事もあらざる
少く事とせまきて進めらるる事とせまきとせまきとせまき
未とせまきとせまきとせまきとせまきとせまきとせまき
されきとせまきとせまきとせまきとせまきとせまきとせまき
君のは得て中ありは却てしほ少強きとせまきとせまきとせまき
皆一とせまきとせまきとせまきとせまきとせまきとせまき
中候とせまきとせまきとせまきとせまきとせまきとせまき
有ては病一強しとせまきとせまきとせまきとせまきとせまきとせまき

加増一納戸はよき事ありとせまきとせまきとせまきとせまきとせまきとせまき
岩崎少強きとせまきとせまきとせまきとせまきとせまきとせまき

江戸具員あふの事

京都さる事との京都あれと笑ひしは此誹諧師室晋敏
と角一それ相奇と強りりぬ

東ある都の拍子ね思ある事非田のまつり難とせまきとせまき
と角傍りて

名目や大又事をとせまきとせまきとせまきとせまきとせまきとせまき
都道一とせまきとせまきとせまきとせまきとせまきとせまき
とと進て江戸自強とせまき

人としてすくく通る中門アガ

弓術古実の事

そは記取神代のサカウラの後と弓師の職人よ中付
らまゝの設職人よ太鼓の事知事のかゝるよあふ
江戸の弓師能へ承り合まゝふ知人あゝ太サカウラ
有徳院極浄代よま好まゝてな 仰付の殿の事あし
太鼓ハ栲の毛と送る栲一半やといふよ通る事ある
らん太の栲よお調へ記取へ納ぐれハ 公は望んゝく大
よ笑ひを給ひ太ハ 有徳院極浄代好まゝてな
仰付非代の後の名とはかりな半サカウラと銘と栲一

と安及ふつゝあるていあゝとて内返一よお朱まより
所々詮義して弓術師能いゝゝ吉田孫五太の言へ
問合まゝ折々布きて孫五太の太鼓ハサカウラといふ
ハ栲よて栲ゝゝ後ふり別非代ハ影形と飾きゝゝま
なく栲の美本とたひめて後と栲一ゝ栲ときてサカ
ウラと清くしゝまゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
記取公は誰よあひゝゝやと太の弓師ハはるゝゝゝ
まゝあやうに中上りれハ吉田の苗字と名ゝゝゝゝゝ
古実者ありとは参りゝゝゝゝ

下巻の事

記取ハ議ある事

或年の暮より予り親一かり一信人等一々一か
うう才上飯前より信年開後大海の氣色と飲一居
たり一々一門口と棠標くくと悠々と南ふまう一々
あふ一きるおう一々一思ひ棠標と穿てまね者よせん
と呼入られハ右高人さハハ之之葉斗の由りてま葉十
四五把の籠の内子垂り子細もあ〜んと煙草をとと
振とくまふと南ふま〜ハ何れ棠標くくと呼ふか
と云ふれハ我亦りまぬさ一向ひしてまをる〜ハ
ハハ二十年程以來棠標と穿て海を〜ハ勿論三
十年來南い〜ハハ右の方多く右の方までさ〜ハ

たよよひ〜ハハ何れ〜ハ親父も葉一とて葉と拵系
ア〜ハ何れを拵系〜ハ調〜ハ終りぬま〜ハ
ぬのき〜ハたけ〜ハハ何れ〜ハ強〜ハ求ぬ終
〜ハ不苦〜ハ終りぬ世〜ハ新〜ハ異物〜ハもの
被信人一方毎〜ハ〜ハぬ

天竺論論の事

或儒者の中〜ハ君父と弑一或ハ盜賊とあ〜ハ人
倫よ背き一〜ハ事あま〜ハ公儀より〜ハ許〜ハ
誅戮を加〜ハ是天竺の事〜ハ終〜ハた〜ハあ
ぬ〜ハ日月の小事も〜ハ背きたる事あま〜ハ是ハ

誅戮をより加へたる程に到りてはたゞさきゆゑに
終りぬればたゞの三百の石も一石つゝも狭くおし
たる及理といひぬ実子を西のきけへおしん父母乃
子と思ふも君の位と見えどもは公も一石の悪と
見ても怪へき事おしんと云ふ記き

江戸武器自然の事

浪花の崎池屋方といひて大坂第一の豪家にて大小
の銃炭用を引交さるゝ船にて明元年牧中越中守
との詰司代を任付ては長徳寺長徳城代を任付未
江戸におかき一折りゝ長徳寺の伊勢系をあらへ江戸

喜へも出り、物中おハ親しき御もまゝに濱田中屋
殿長屋とかりお來ふよて皆く言たるゝ長りしり
當時今限日向おお親に話おより答意大方あつた
日々改業改物お終りりゝとて或日言たるゝ借用の
長屋およてお中の子供大勢おひわたりとて言たるゝ
兄及び子代中付るゝ所より終りり一菓子お
おいきゝおよて控るゝりお言たるゝ付たれ子とて
振也よかんとやゝもゆゑ子代た子供を味菓子と
よへゝゝに彼子とて中々ハ我ハ武士の子や控るゝ
よりお言たるゝ菓子とて言ひて皆や言たるゝ何程

争持までし、元來所人之不切の中、糸分と件乃菓
子を投返し、又ハ小石分とを投歩ぢりして、以の糸
きりハ子代術院云して、宥めらるる有子供き一
了管して、静まりしと、や、若たつら中、糸江戸の氣
風ハ不合ふと、此の事ありと、や

戯き鄙言の事

戯書鄙言、つら、用事ふたれと、又、尚世の姿或ハ人の
心、ほろもあまき、れと、素、原、豫、ぬ、の、ん、き、つ、ま、し、
事を、文、上、記、す

仁過きハ弱く成、義過きハ強く成、礼過きハ端よ成

智るるきハ嘘をほく、行るるきハ換をす

心ハきく、初めハ強く、後、落く、合、細、し、し、心、初、ら、う、れ、

世中ハ、這るあま、な、ま、か、い、ま、入、し、ハ、法、を、あ、り、

不用、あ、ハ、法、世、用、内、學、家、致、し、つ、く、を、い、折、し、物、志、を、許、

邦智不可計事

有徳院、攝、侍、代、ハ、内、小、御、戸、を、初、め、一、落、合、ハ、ハ、小、十、人、

既、亦、仰、付、喜、節、ハ、制、し、り、二代目、落、合、ハ、ハ、と、て、第、初、法、留、書、是、書、

ハ、代、ハ、ハ、ハ、と、名、小、十、人、既、亦、仰、付、し、り、も、あ、り、お、初、手、し、も、日、と、出、合、お、人、よ、て、あ、し、侍、奉、法、供、

り、て、組、一、同、法、先、侍、前、を、と、く、お、依、し、て、飛、く、り、り、

法、訓、染、の、事、有、ハ、ハ、お、出、ら、い、し、き、方、配、の、志、名、お、定、て

仰付り有康福お年のやあまのちききあそ思ひあんと
巻説まきとて防公たけの事持もち字あとて見みをある人ひとを
実まことの自詠みづかひあるや人の語ことばりきき康福公たけ市名いち代しろ木
て和わとくは報うけの途中ちゆうちゆう東あづま處ところ山やまに所ところ家いえあり思おも持もちへ豆腐
を入いれけはま持もちまけおくりきん石いしを天あま秤ばかり持もちへ魚うしほつく
苜むすろくして海うみりーと康福公たけかゝの内うちより又また多おほひあまは
何なに事こととておれりーまかき給たまの志こころ志こころのよし言ことばたれ
由よし彼かほを信まことよし語ことばを喚こゝろけい西にしあき事ことを物もの奇
きーと中ちゆうされきるよーと豆腐とうふふ石いしも附つの釣つり合あ
世よまたりよんきりらくあめう豆腐とうふふ石いしも附つの釣つり合あ

鬼谷子おにこの取と捨すの事こと

お永ながの治ち治ち系けい馬ま及およ鬼おに谷や子こといふ減げん治ちの業わざを
且かつ雲うみ字あれ学まなぶとて人の言ことば出でを語ことばりあそたる奇き翁う
又また辛しん年ねん百ひゃく業わざ餘あまといふも語ことばも実まこと辛しん年ねんを
知しるのあそ大おほ
の門かどへ予より許ゆるへ事ことりて語ことばりらるはけ以もつ鬼おに谷や子こを久ひさ留とど
弟あにへ呼よびよし御ご信しん作さくの上うへを翁うあるとしてさる教しやく
又またおひあそ一ひと或ある時とき志こころ人の事こと有あ言ことば笑わらよりかむ能あたよのり
の出入でいりもかむれ終しまりて然しかまとしてそ誤あや中ちゆう流りゅう一ひと時ときは
まーらあそ度たび目めもまらん你おんの通とほり事ことつへまじり
系けい藥やくのほり通とほりききとて善ぜん智ちめらるるは何なにそのあまは

宗樂のまゝ通して一有附原の者志らくの由
免一あまといりくれを番士何ふ取せし之有かる
よりり家子久苗兼ら一有しをとりり兼るま
と中友の入侍めらるハ大家の事をまいた程の事ハ
まゝまゝ志生として通してかゝるまゝ兼る内と通して
鬼谷子まゝとい我富も金銭の事ありといとも
下妙の志願をせし石録の法度より抜き恩遇ある
事いへりまゝに媽しるまゝよる一志一ちよる兼
會意まゝすに合ふまゝにてはもうぬ事ありて親

あまをある一内一し一付しこれハ恩遇給ふあまより
まゝ抜きまゝあるとも孫世するのあまをて内かゝる
まゝ通してまゝ一又つまゝに給ふ一にまゝして不
祈りまゝに兼るまゝといふにまゝにて太いんんん
遠かまゝにおねのまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
和合して交際をたゞまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
有一とらや

物ハ一途よあくてハ兼給なき事

却てある候令神仏を祈まゝにして一途よあくてま

けりぬ及びて後初の初穂を献し新叶つんと云思ま
の公つゝいかに物れ多女うううと十二箇の初穂もき
よきよきと持ぬ大坂及松坂の涼茶を合回振の神よ
て思ふとす。出ぬあり、きほに戸表へつゝとて或は
いさりの又いさりの思ふと、若年の才を大思て候ふとす
る事あゝいさの出家と云ぬへとに戸表へつゝりえ
より終なきいさあまの合回振物考ひつてわたり
いさ大勢尋集して思の候事まりと云ふ右いさり
も中へ入るなり出ぬよ向い出ぬハ大坂及松坂よわたり
いさあゝきやと云ぬハ、物れを、出ぬありといさ

在あゝハ年月はつゝり何卒出才の思て我あまを
て終るへとてい威程か候いゝきすへと何と布控
よ出へつゝいさいさ役しきり大よぬりぬ、サ、益の事
て久く出とるひとて、いさよ遠く、喜まが我只得來
のあゝととを候つたふく何を布控物れと、き
と云ぬハ出ぬつゝとて、歩笑ひ人よ、大半と考む
うゝハ、才の精才を、いさ、何れ威意あゝんぬ
侍もある西桶の中に釋らり、き、合回ありそれを
布控よ終るへと云ふ、た、控て、たのいさり、物れ、西
あき事く、いさ、釋安、合回あり、是今日、命と

法なく合物さうり是を市控よきんとて出さるれハ
彼僧右の合物よるを入一粒も不致吟早て志う
てか持しとて一とて何れ思文を唱へぬ志文定
の上六兜の加護を一一しきまてる一とて中らう一とての
通力もや何れ昔もあくまより快くあり一とてや
小聖仰あ物語を定まよ記

山中居之助武邊判談の事

山中居之助ハ往古武邊の場数あひあく武勇の男
第一り或合戦遊て初陣の若武者二人居之助は向ひ
今日初陣よて敵と進と合き一折り一返しておまひ

遠ひ敵よ向て先震を生し一中くさきて敵をころす事
判新く仕合よ進付首を揚り一とて道の毛皮をふ定
初る物よて中く存れハ何れ種と出一返りて時
武邊の人よ半死りんとてさふたう一人中らうハ某を在
福よハ不存さす敵く多寡合敵ハ何れ道よく何の
毛の毛にましと進付ハ場所をわあきやうよりと後
くれハあき物向一折り一返りくる右あきを序をまては
侍の人け論を席と助よつり一とて先の若侍武邊の人よ
第一一返り一返り一おのこハ甚かえふ一とて一捨ひ首よ
てハあきやたも折くハ守りての軍よ付き中一とて云

一り果しては日々何の如く一客々中なるハ某某と
初任或二三度目の往來ハ當初の士方一如く客位と
生一中一服を以て向ふと云ふ事ハ難一き事
よ向ふと客位と一といひ客位よ首をたれ一と云ふ場
數を涉て了と云ふ振ふも志す物と云ふり由

津庵忍書之事

津庵の如く忍書をし村行何所其の由とて一
里ぬ
飯ハ何れきあゝ喰ふものそらゝゝきと止んぬよ喰ふ
よれりゝゝゝ事ぬくハ喰ふゝゝ不入ゝのよ能く

深このぢゝゝハ飯ハ喰ぬよれと皆人のりやそむる事
ある偏よ初ゝゝ止ん為の謀ゝ後よ喰ふ飯よあるも
は物ある下ハ喰りれぬハ未飢の事ゝゝゝ飢きゝゝ
ハ一生喰りてあゝんゝ一飢あるハ止んおわて糖糰
を拵ふゝゝハ況が飯よ拵てをや何の法ぬゝゝん
請食如服藥と云ふ佛もき教一終りゝゝ衣おゝ亦
め初人の衣舎位のゝゝ一と一と送ゝんけ公ゝゝより
我三ゝのゝゝゝ一と一と

大木口哲大坂屋平六十五嵐瓶膏茶に戸見させ初之事

大木傳は帝世甚高宗業三人の同士の事にて江戸
へ出てあるは於て今お意の事一々も大の事なす
を出し付て出世の事を約束せし三人を約束の如く
お集り或人の噂をすし傳は市親口哲は口中医を
以て一予らえし事ある事一傳はにても高宗業宗
業の先祖も口哲を所授の事にて祖父の代を以て
申登き一以同を授け江戸へ召きてき話傳へる
事今ある事一親口哲といきし由大傳は市始
て江戸へ出し以同傳き一大坂屋平六狐のうやくを
高いにおよ油高いし一今高田上野の五十嵐屋に

右口入江戸へ出きし一四人の内三は出世してふり
届きしあるはあるは話しすし一と約束して縁を
以てせし一傳は市ハ齒磨口中某木の辻賣家と號し
以て仕合し一新橋よんきを出し五十嵐ハ高田
をきを出し一平六ハ京橋稲荷小路の生き集りとい
狐のうやくと存付て是又お意の事一又上を固めし
平六一人ハ仕合する事あるは内家人ハ内番葛の縁と
掛く湯のよし一或口傳は市ハうきへありし
この中今も各三人ハお意の事一又上掛縁ハ我ハ
新橋して高田縁を妻子ををばあくとありし

恒々茶と交々中々茶を交々も弱茶と交々いり
いうもこ又中合を話すといと五十嵐并平茶へ
お徳して何事も難捨重事として彼を話す
今ハ大坂屋平六をきハ九尺店してあ中き
本茶制一丈中之上総をみて左前へ引込る百太
又を名代を賣渡りの法話を少者事あれハ右名
代を買て彼を扱を取之といとあ徳の上今六十あ
りて生茶并石仕の小茶を譲り流し由あ徳多極
口哲并五十嵐より今廿あつて百出ハ平茶十あ百出
ふ是の茶ハ右茶扱れ株式并古屋を在街ハあるお

拂りあふ茶ハ十二あ百出ハ難あく構を酒ハ大坂屋
平六といふ茶種店とて低高の致ハるる平六も
生茶の事ハ女ハ公治も出情いハる上は哲先
祖の傳は市子ありて本所三丁目今もあ積いさハ
孫多あとお對の上いハるハと新ハ茶種お徳
構或ハ採集のふ野あ事あるをお對の上ハ倍百又
はハ平茶右茶は哲平茶五十嵐茶ハる傳採分ハ引
風の茶を扱ハ話の風を扱ハるハて話風茶と号ハる
以ハるハ引れあハるハ折をあ細風を治
る候と認め候てはハるハ引れハハ浅より百又

の古修葺ありて善相市たつおも上京ありやお目の以
御府より右風上才してハ六七月の以この外流り
くるとしてたふ付おうきい所まとしてたふされまむ大
坂までぬ事むる由風の神おくりとして大造り大
敷をおち中一葉人形或ハ非人おとを御錢を以
屋とい風の神よ抱へ送りまむ京大坂の侍癖
て大坂まてもそは非人そやとい二三所若その中
今き彼風此非送りとも真りハ証大敷之味強お
りてちや一送りくると若きを真り葉一くるとや
或持の上より実為一とつと笑ひ我々おこしあり

まむ非人はくくといひくるとハ價を以て廉き一と
ハ云むのくといふよ多枯のゆふれをよて情あくも持
より実おと一まむ根や一さよ付才アそあまとして扱
よ入彼風の神送り一所くハあり表より戸をた
きくもあ何とれやとてゆれハ先刻の風の神又くま
ゆり一とあむ哉いやくまむるとして京中の為談本
一とこらや

今書方ま蕪評を中上事

有徳院様御代予まむ六帝ハ上年のまくま一り或付
御前ハ御召出らるる室生ちまハ上るありとせよよは侍

通 遠い面魚温涼の相よく舞ぬ氣取き
きく有 仰府の上人の後りくれいまいたとて
利聖像の圖廣のこくを不出し聖像ありとて本
佛は取定めしとて及ふし後りぬる有実とて
有しとて是ぬるはまの記のぬ

人の運不可計事

あまき聖徳代のおさふ苗字の志きこり幸たふと
いふ者も一由今ハ又後りし一彼者存所記ぬ
黒井村といふ所までか田といふい合て鴉同族の場
所の一右きたつハ若年より業書親元ハ仕し

きくは聖徳代
はたつハ記ぬ家伝初

同ハ人オも一有是をも和予山ハ

初きし一きく一正して一幸たふ
毎その印見オオも逢くる
か田の海西生オオ一第て後る
流か田ハ後りりるも一か
付又母兄オオにふとつけて
中々ををいふ一あおゆり
約き一はあふれをてゆりぬ
一村一信の内ハ破却して
の抱と集し一あふ幸たつハ

又

了明二宮年淺く山崎にて上女の内甘樂碓氷^{カニラ}孤^{ヒト}也
片畧方郡村武二三尺或ハ一尺程に焼砂より積り田
畑を押し堀川を埋め溝を造り井は石ハ火れま
りて隆一有^有家を焚^焚くも^もを怖^怖る^る又上女吾妻
郡ハ溝^溝の深^深なる^{なる}砂^砂の積^積り^りより^{より}あり^{あり}れ^れと^と溝^溝の^の深^深
殊^殊形^形とい^いつる^る洞^洞より^{より}泥^泥火^火石^石押^押出^出る^る家^家長^長を^を押^押流^流し
人民^{人民}泥^泥に^に埋^埋り^り火^火石^石よ^よ六^六高^高生^生熟^熟焼^焼成^成り^り吾^吾妻^妻の^の川^川
つり^{つり}ま^まより^{より}取^取る^る武^武女^女橋^橋津^津郡^郡田^田を^を利^利根^根川^川鳥^鳥川^川に^に通^通
所^所より^{より}一^一丈^丈も^も泥^泥の^の押^押上^上り^りる^る有^有人^人民^民の^の死^死傷^傷不^不

女子^{女子}古^古く^くは^は用^用 作^作を^を蒙^蒙り^りて^てふ^ふ砂^砂田^田村^村ん^んか^か一^一聖^聖妻^妻
また^{また}ふ^ふ橋^橋前^前は^は吾^吾妻^妻川^川も^も出^出来^来り^りる^る吾^吾妻^妻川^川の^の河^河原^原に^に
祖母^{祖母}流^流す^すとい^いつる^る被^被泥^泥出^出る^る折^折る^る老^老女^女と^と死^死す^す也^也
たの^{たの}き^きは^はな^なら^らぬ^ぬと^とい^いふ^ふ人^人に^によ^より^りて^て一^一日^日に^に一^一寸^寸も^もも^も聖^聖日^日
よ^より^りて^て女^女と^と流^流り^りて^て流^流被^被と^と人^人を^を取^取り^りて^て一^一日^日に^に一^一寸^寸も^もも^も聖^聖日^日
て^ても^も女^女人^人余^余も^も押^押流^流され^れり^り兼^兼ふ^ふ是^是も^も信^信じて^て死^死す^す
ふ^ふ死^死す^すとい^いふ^ふ人^人と^と驚^驚き^き吊^吊る^るひ^ひら^らる^る河^河原^原の^の岸^岸原^原に^に
物^物を^を取^取る^るも^もれ^れし^しま^まな^なら^らぬ^ぬ小^小児^児を^を取^取り^りて^て一^一日^日に^に一^一寸^寸も^もも^も聖^聖日^日
中^中に^に赤^赤外^外を^を取^取る^るとい^いふ^ふ人^人に^によ^より^りて^て一^一日^日に^に一^一寸^寸も^もも^も聖^聖日^日
流^流す^すて^て死^死す^すハ^ハ村^村方^方の^の百^百姓^姓は^は母^母孫^孫を^を取^取り^りて^て一^一日^日に^に一^一寸^寸も^もも^も聖^聖日^日

お果春あり孫ははるごとくや五日の事とて
すむ日と泥中より傷を脱ぎて親母の果より小児の
ありたるもあきらむる事ありとて記す

信心よき物ある事

明和九年春の大旱りといふ事ありしにその事ある
より予を備の美山某の書に「予は乃伯母
依竹を京大より得た事ありて大旱りの事ありしに
之返りて何事とて予もや得た事ありしに予は乃伯母
の祈りて得た事ありて予は乃伯母の祈りて得た事あり
小女とて事あり」と記す。上は乃伯母といふ事あり

迷ひたりしに予も道も迷ひて疑ふ事ありしに予は乃伯母
の祈りて得た事ありて予は乃伯母の祈りて得た事あり
二人連りて道も迷ひて疑ふ事ありしに予は乃伯母
の祈りて得た事ありて予は乃伯母の祈りて得た事あり
ハ大なる祈り我ハ介抱して其の子を付き小女の子
を脱ぎて下りて予は乃伯母の祈りて得た事あり
これハ乃伯母の祈りて得た事ありて予は乃伯母の祈り
の祈りて得た事ありて予は乃伯母の祈りて得た事あり
公地にて大なる祈りて得た事ありて予は乃伯母の祈り
むきいやくて依りて下りて予は乃伯母の祈りて得た事あり

雷を驚かす事

諸家の礼状あり十箇あまはむとありて一年度の
此礼は徳氏意の上幾事よもて致して多岐の中し
られハ申ふたつ言て我おも始方大勢をわらふ事をも
ききハけし上たしは歸るも何なるあしんもけり新し何
とそ右の業法を傳へ給ふれと教へられハあき事な
らう右ハ一教一夕の傳文よも半教してていふに
ハ申ふたつ中らうハは夜なつり一令子も返を致し
返て申す子も下よ不及早き実業を以是をき法改
りし右業ハ素子方のききるも傳文を教へし取調を
き丁を始りき由ふ申す子よ半中なれハ医師も取調

伏しし中申す事よむせはしハ傳文は致し空体も
かりんの法もあまりしに五日返るの上於十日程
ちつ方に返る一三冊の書物を致し一も書つしゆり
右業法を傳授の上調令して実母者と号し一書
かほの妙業の教へきられハ法方より毎日調へ書
事引しきしは孫の中野宗利分を得中くは新商
業ふとて致遠なきあまハ右高業のよもて千箇を
おの四五ヶ所も所持し一書附も書よさうへら

峰の業を取調の事

峰の業を致すは第一等ありて扱へ扱ひふとまきハあち

アテ害をなす半あり果をこらんと思ふ大果乃
下よる果の石もても尾よても半返一ちをうまへん
控多に如何指の増もても害をなすはとく曰一老人
の語りきるハ蛇の石垣又ハ穴ハ入るり一を引出きん
とまらに法をさうけ力を入る引出とも磁蛇の洞中ハ
切るとまら引出一殺き物ハちを引出りハたの
るもて已る耳をさへ引出きよこさる事なく出
るおろりと語りきる業たれ一なる事ハふくれをた
志人ハ蛇のあへりきるをさ一と語りぬ
人の性忌嬌ふ物も半一

享保の法は先多を法とめ一終末何き未百有を
を嬌ひ一う或時茶をよては五人集り一折れ
吸物ゆき何きも菓を前一は伊き未以の亦ふ性
てきもあつあつもあつあつ何きも折子存一は若
吸物よるをむの根あといやき中といひ一はこのねて
嬌ひを存き一半あきハ骨てた板の事あり一と換
抄よ及ひきるに一生の終中ハゆりの画きたるも
る人ハ驚ききてあ建引くこれハ元のしとく快くあり
一と松下隠れ語りぬ又さる所もあやめ梅口小
学といふ医師より一流を始りし事あ流の居候

け後うてハ果しては折子を知らる。或時回察の志
お誂一茶飯を振と一は小学をも折きらる。折柄
小学ハ断より来り一有こもて嵐始ひ餘り男
やうくぬ何実年や難計とて嵐の死くを求めぬ
小学のつ折るのつよ入道志くぬ顔してお誂一は
小学来り一有折を中を譲り右の志く一息生好飯
をも出ーらる。小学折りハ顔さあーく想つ男
汗をあらう一甚不快の折子有ぬ何致一ハやと何事
毛中きらる。挨拶事道。折の折子よてこ一ハ嵐の
事や一ハ中出ぬハ折果一ハきんハ多あらうしんを

口を更折を介抱一ハる。福書をとらる。有人を付て
送りきる。志よてハふ也美の娘ハ折とて折あく人
をき一折子をゆらる。ゆりてハ何の障もなきよ一
席ハ連り一ハ回中中減医ハ本宗依話也

てらる自他之事

了ゆ二年其のハ隠密ハ断一有。其名ハ記我も一ハ
ある人のハ折あハ折を譲りきらる。下若也ハ折をある
人の業ハ其ハ素性不直ハ仕回折の志よて一ハ
心して一ハ折あらう一ハ志ハんハ折ハらる。一ハ其
折あらう一ハ又ハ其美の障一ハ男よて一ハ其一ハやまハ乃

彼方怪あつて有りて彼妻年久安石仕一下男を
これか業の所業を新きより一語りきりて彼僕を
たあるより一途へくるり或日まふ候まで外より帰
りてよき業を念に極へてまへ後を片へり
り何れいつと誓ひて一あり新に彼下男と業り念
事の中へ何れ入るを信一有る人の前へ出目を
い極して志きりて左子細あつんと念にハ不奴由
中これハ業の折角極一由強て勅められとけを一口
終るる心地悪愛として後をけき出りてかく終り
きより一途まは片へ外くるり下男あく片へ終り

うめきり極下男も延付てきハた業まの首へ物を
確い押倒し片をまを力ある男まで起上り
下男も極業り一業まで業を片くるふて討ち急
所又あつり片死しる由を所の志も終り付
まらあ志うくの由語り内密して事跡より極
悪ある志をもその志と志し記

旧室風和の事

室唐の道達誂誂の家匠一なる旧室といへるを此
むろく業おの傍りて西ふきと性の志也神
了も物かあく終り一夜も與り業してハ人り終

与へ抄一々々々或時麻布邊の武士居交の門前を
通り一々細術秘言古の言一々々々を言て頻々一
本きいふ夜公より言突よ玉り案内を乞くは
秘言古相えを教ひら由中入りれハ則ち其處へ通一
らるるよ又其言大法師有令く一物の事りて傳公
を押ゆるあくと集り一々々々も悔きらるる言入
ハ幸若の人あお意の挨拶をうれハとかく言ふい赤
一本結度一々ハ其場までハ世之内秘言古あると
一りりらるる言え切て一本言合た一々々一有言
授言一々宗匠の事うれハ武途の事う知指あく

き一々言志一々か言を言きらるる言て中其言一より
あく痛き目よ逢一々祝言を言りれとて言祝を乞

云日るやう一々れて一々一々百合花 四室

とて言て言りぬ言まで入一々言りらるる言の四室あり
とて大言笑ひ一々言武時宗匠言一々言法侯の許へ
より言誂言言一々言一々言一々言言の所の床よ出山
の釈言の言物言一々言の言はめて言を教一交と
中々言同席の宗匠言の言出り言言言を言一
言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言
言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言
言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言

賢君或時存侍る所 御成の旨大なるてありお
きくありて水のたきし相違なきをぬひ侍後所存
侍古へ内立ち侍禪の上なる事法上とて上法とて相
違ひ侍て侍後をさるる 上なきとて下の子將
部免かきり形なき事たもて事ありとてさる侍
古法侍よるて如何よりとも侍獲お多く公悦の事
中上り多きは侍後より美なき所 上の法侍後能を
公悦とて中上事あると出家の身法侍得よの
多きを祝しけるハ何とやらん似なきありと笑ひ
きまハ重 上法とて侍却て公悦遠より出家しても

侍了らハ教生し中一むハ丸 將軍の教育よは
そけ多きハ侍後より石侍後ありとて却て
侍後員とてとて

古屋相撲古法加増事

古屋有院極侍代より 有地院極侍代と新仕よりし
古屋お孫吉の父徳とてハ古屋字花次男より小福より
四万石より果をてハ古屋お孫吉引はきい志願より
一代より五万石の内加増侍後より當時九万石の内産
出より古屋お孫吉考願より加判の列侍免を願ひ
侍後致度候事致るに 有地院極侍 侍後加増の

列ハ侍免後世の義ハ侍さし一箇と云 仰出誓まてき
万石の法加増よて後世に 付付くろく信居の候ハ
一度登城より由志藏の通 市陣内下守云尺木
有之侍志中より出 城より一々お探りよめ
石門自寛ハ十余よて予ら許へ来り候りし由志^記仕
らまし一砌の法加増より半路へある友より記

時代移替事

大志又自寛咄くくハ一回入るえ福十五年法聖家坂
盤のよし生よて大志者ハ不足え砂路一歩ハおろろ
よ是より強く信付ハ是も暗く是より由根津控記々

のよき侍建まよて、生砌附の御縁りくは事と云
かりき外世中の指子思ひ合ふれハ悪く遠ひし事
自寛お若年の言ハ附の外若流流り候り小姓と
て大名侍様奉よて免事を振く抱事よて自寛
七壮年の法ハ大候り小姓致し七尾家譜代と成
り御よりお探りよめ初仕の由我も免事よてよりと
候りし事侍の御前若少年半死白頭翁を思
ひ出し文よ記

前生お記を新極事

紀別南院院殿遊去以その法建辭よて若遊去阿々

を裁刻して謄をきく一彦由師の坊へ頼ひくれは
例より一回察れ出家より一意きぬ大頼として自ら
神もき笑ひし一信をよ解の坊ハアもまやもらん
むの頼成就頼ひまへうとてまへうまより信
来れ多き粟田口邊の海なるまきく流来のまへ
大頼裁録まきこの信を述る合力をとよ一入乃
侍通り抄りし一何程もても挨拶もあくむて一
甲頼も付くれをえ向とまき信のまきく合力をと
くれハあくうるまき坊と信中より一浅を出し
ふへくれハまき一とて頼の信頼ひ一を大侍まき

をくくと付まき一浅を信ひ一を向一よと日大
頼のまき一浅を信せられハ神を信ひぬけ一浅を信
一を一切種制然應物と思ふと云一ハ果して自ら
られして一切種裁刻し一くると云

名君世の賜を捨給ひる事

有徳院極風とは考まて友の夕よありの故を信を
習へし 仰付 孫子の袋を握りて信をきき捨給ひる
有故とまき少く本くる大の故を信亦科へし 仰付
膏茶よいきし一吸ううやくし一用ひぬけし一勝徳を
すいひり奇蹟まき一とあままき信をきし一を予り

許へある医師より事を語りぬれは却て業割も
取をきめて用ゆる事多きことゆゑの法違ふ事
以下文

親物事の奇偶の事

加勢の将軍の付のにせむ女向ある事や瑞物
當るに仕奉るぬる人事をあはしと不能入
ふ生きてはぬふせうの端ある事をあはし
内侍の露香の法なるゆきよ太清子の巻の情を
南小僧婦をけいごめといふはゆきよ斬を並しけし
乃

そのを解くはゆきよはあはしとせむ女向ある事や
語りし瑞物をあはしとせむ女向ある事や
く或はゆきよのあはしとせむ女向ある事や
笑ふのこゝろに強ていあはしとせむ女向ある事や

よ中侍一くれの先を業をあはしとせむ女向ある事や
あはしとせむ女向ある事や
と後でゆきの口又ありくれはあはしとせむ女向ある事や
わが一軍ぬれて親方ある事や
合をよへ引元業とあはしとせむ女向ある事や

武邊年段の事

寛延の末のころあつて日本たつとつりて空城の張布
もてお石捕刑罰の事なるを餘り一人の心
伏ありきさうとつりて一寸余の鉄杖を可持
して是より向ふをねをぬるをいひてあつては
殊に業いふをとりやう一依之鉄杖をよつては
吾黨なるより大坂の回公の中より武造れをよつては
を以て親あくと捕らる由きを候をよつては
心せき五尺より一寸程の鉄の杖を握りて
彼山伏ら若くありあつては修く物強の上側より
まゝ一鉄の杖をよつておははるはすきすき鉄の杖

を用ひぬふとのが我おも鉄の杖を好む可持き
に業なるやうにせしむるに持糸の鉄の杖を彼山伏
よんきくれは山伏をよつておははるはすきすき
きんふふ表はるとんきぬしては杖を回公の候
一同心の持糸杖を請ふ詔あきくをよつては
彼山伏ら杖をよつてあつては山伏ら若くあり
しつりてをえしつりとあつては鉄の杖をよつては
きいそつり一寸より一寸延てはつりてはあつては
かよつてはき新くは中程の志大勢をよつては
石捕りつり一寸より一寸延てはつりてはあつては

怪僧事蹟の事

小日向邊の位に在る水田の家祖父の代と云や祐平
一々ある家來ある日つあは居るに一人の出家の
下りる大に祐平とむい今日も種を云と出候る
其許の心を貸りて預りりりり中をぬ何れに致し
いふと居るれは此の口か一と中をぬ知たりり
いふに居る中なるを怪あるといひあつる雨風の
ふ一書しるる預ある一人の用事あるて筆を
ふるる満ふ一書とむくといふとされはたよおとらき
と入るりも居るるを志るくの事と一とやるる

うあ三日して後寺候來ておくは後よりて事を遂
かして一書ぬきよ一何れれの事もあるとて信
より此の徳にそのを先出は是はと一を信火災
の言はあを床りけ垂りり火災造るつと一して
まさりぬ依く一人も妻細の許を告大徳物を
一人喜具して所持しつと一する大祐平とえの如く
多跡出某のきつと一するよ一を信を所火災の事
あは度大徳物をこつけ垂一あるやも信を所かりき
のうききもあつある時信の信也信のるもあつりき
まは家来此の信してあや一の信あるまをびり

Handwritten text in cursive script, likely a signature or name.



